特260
63

玉葛

昭和改訂版

内一

始

特260
63

玉葛

（梗概）諸國一見の僧、泊瀬に詣でんとて、初瀬川の邊りに到れば一人の女小舟に棹さして來るより、僧は怪しみて其故を問へば、我も同しく泊瀬に詣て來れる者、泊瀬の枕詞は海人小舟なれば舟にて來れるなりと言ひ、夕霧の絶へ間〳〵に紅葉の美しきを愛でつゝ共に御堂に參り、やがて、二ヲ本の杉の下へ僧を導きぬ。僧は「二ヲ本の杉の立所を尋ねずは古河野辺に君を見ましや」と言ふ古歌の心を尋ねしに、女は玉葛の内侍が筑紫より逃げ上りて此所に來り、母なる夕顔の上に召仕はし右近に邂逅ひし時、右近が詠みし歌ぞと教へ、尚も内侍の身の上を委しく語りて姿は失せぬ。僧は爲めに回向をなしければ、夢中に内侍の靈現れて妄執を晴さん在りし昔の事どもを懺悔しけるよと見て夢は覺めにけるとぞ。

シテ　里女
後シテ　玉葛の内侍の霊
ワキ　旅僧
所　大和國泊瀬
季　秋

玉葛

わき 詞 是は諸國一見の僧にて候我此程は南都に候ひて靈佛靈社に迴りて候又是より初瀬にまふでばやと志し候

上 楢の葉の名におふ寺の古跡をたづね思ひ續けて行末は石の上なる佛跡の法乃志るしや

三輪乃杉山本過けバ程もなく初瀬川
水も岩ふなりし　急ぐ程ふ泊瀬
川ふ岩くゞんぐ関ふ一見んせんやとおもひ
程もなく舟の泊りや泊瀬川のぼり
かゝる岩間や水の水上弱ぬきバ
初めハ昔此雪なり　舟人を誰を

まつふとくおぼしまの浦出しげふ立
そぎまぐまきまふける古の跡りもいさや
白波乃よるべいづくぞん此月の浪舟を
そこと果しもなし　唯我ひとり北別
笹雪を袖乃名ふのこ　着て行秋
乃渡り樹樹ふ　ふる河辺此ふし

くも人や見給へん身の程ハ影深き乃
樽をこゝへ繰寄せしきたぐひやく
わき
ふしぎやなこの川ハ山の乃ぢを淺くして
ちらもみなぎる岩間づゝひよちいさ沢水
に竿さす人を見れば女こそをいづくより
頃で弱ふ人ぞ　して　岩ハこの泊瀬ちるよ詣ぐ

くゝ者者也又ハ河ハ和のゝ名よむゞ来ゝる
上
蟹小舟初瀬北山と漬をけるこの河北面
のえふしあゝ者不審をあさ世張ひそ
わき
とゝよ　家蟹小ぐ舟初瀬とハふるきこゑめ
乃初なるべし去形ゞゝ又ゝたぐひも波小
上
舟よさして渭のあるやゝん　いや伝るゝ北

そまでよりもさんぢ流せぜよ折りふし　同上

見えくる白波く求ぐの泊瀬山

風もうつろふ藤の云に月影も白ふ入

七日沼ぞ出しきこもかくれの浦寄の眺め

白雲寄すぐひなや面白やこの吉野へ

星つぎ奥拍ふりき谷七戸よつなぎ

物をこえぐの雲間よ波多野

果くて沖雲に乗りつつ　別延　補陀落

山も遠乃あとり四方七眺めも妙なるや

紅葉の家よ常盤求の二女乃松よ渚

ふり〳〵　なふ〳〵　見て二女乃

松まて山へ能こ沖海めの山へ　脇　扇八見なるゞ

二本乃杉にこそ心ひかるゝや古き歌に
二本の杉のたちどを尋ねずばふる河野辺
に君を見ましやと、是は何とよまれたる
哥ぞとくはしく　シテ是は古へ玉葛の内侍泊
瀬にまうでて右近とかや見え奉りて詠ぜし
歌なり　共に哀と覚しめして弔ひ給ひ

クリ 地上
実や古き世語り夕日に霧の身の
波にしづみし中にも何撫子の筐もうし
シテ上 哀思ひの玉葛かけてもいさやしらざりし
地 つくしの末までの月　雲井の余所にい
つゝしと　都の住居乃憂きのこゝろ挿しも縁
くみつべき身を　頼志ありつる人の

あらき波風立浦里 曲 便となれバ翠松に
聲通れじと松浦潟唐土舟をまつらひし
にし捲かゝ浦家も只浮鴎を漕となれ
てこそ行方やいづく泊りと白波にひゞき
此灘をも過ぎなバ小さハ西も程しかくて
都乃内迄も我まさう抱ふる船の上粉やう

きあをれ多の陸に波どへるん地して便
本ともよふぬ身ハ世路浅思ひ敷きて西に泊な
やむ足曳ハ大和ぢや唐土とも知西なる
泊瀬乃ちまに詣でつゝ年も経ぬいの浦
然や泊瀬山 尾上ハ鐘のよ流よのさとひ
總ふし古への人ま二度二なれ枕の袖ちど

を弱ねぎぶふる河辺べと泳めけるなふの逢
濃色同じ身を思へば法の衣乃玉ゝ
蔦迷ひを照しぬへや　寒古き世の物語
哀ハ滅色まもり江よこもれる水の衣ゝ形
して、衣世ハひハそめよ泊濃河黒くも紅や淺
ゝぬ　縁よひゝるゝして仏連　只彩むぞよ

法乃人帰ひ弱へ部てそハ涙七泳の玉乃名
と名ゝ乃ゝ法滅よりゝ　中入　掬ハ玉
蔦七幽玉仮よ形ゝ者ひなるぞや　たゝひ葉
周宝ゝ玉　照ゝ法ゝめや日の光ゝ　大慈
大熊乃誓ある　法乃灯あきゝゝよ変新
いざや帰ハんゝ　一セイ　慈渡る身ハそれ

[illegible]で葛いろなる筋をたづねきぬゝん
[illegible]て色法の義よ達んとのんひらるゝ一
[illegible]筋よ生絹なゝでゝ玉葛北孔雀ゝ孔雀し
やつくも髮　上六　九十九髮　カケリ　髮やまふゝ俊
小　京や他ある蓋北身ハ　たゝへどゝ物ん
北　永き間ゝ　下六　黑髮乃　あらぬやいつ

の森孔雀髮結ゝ寄西く黑ひらゝ　上　寒
安物の雲雀勢北　ヤ　逢ひもよしやうか
里ける　ヤハ　人を泊瀬の山下風　たげしく　チ　蔭て雲
色洞も　ヤア　義ゝ小秋の菓北身も　ヤア　杉果弥恨め
しやし　ヤア　恨ハ人を世をもゝ　ヤア　ゝ黑ゝ只
身ひとゝ乃報ひの罪や数ゝ乃うち北名よ

383
3
546

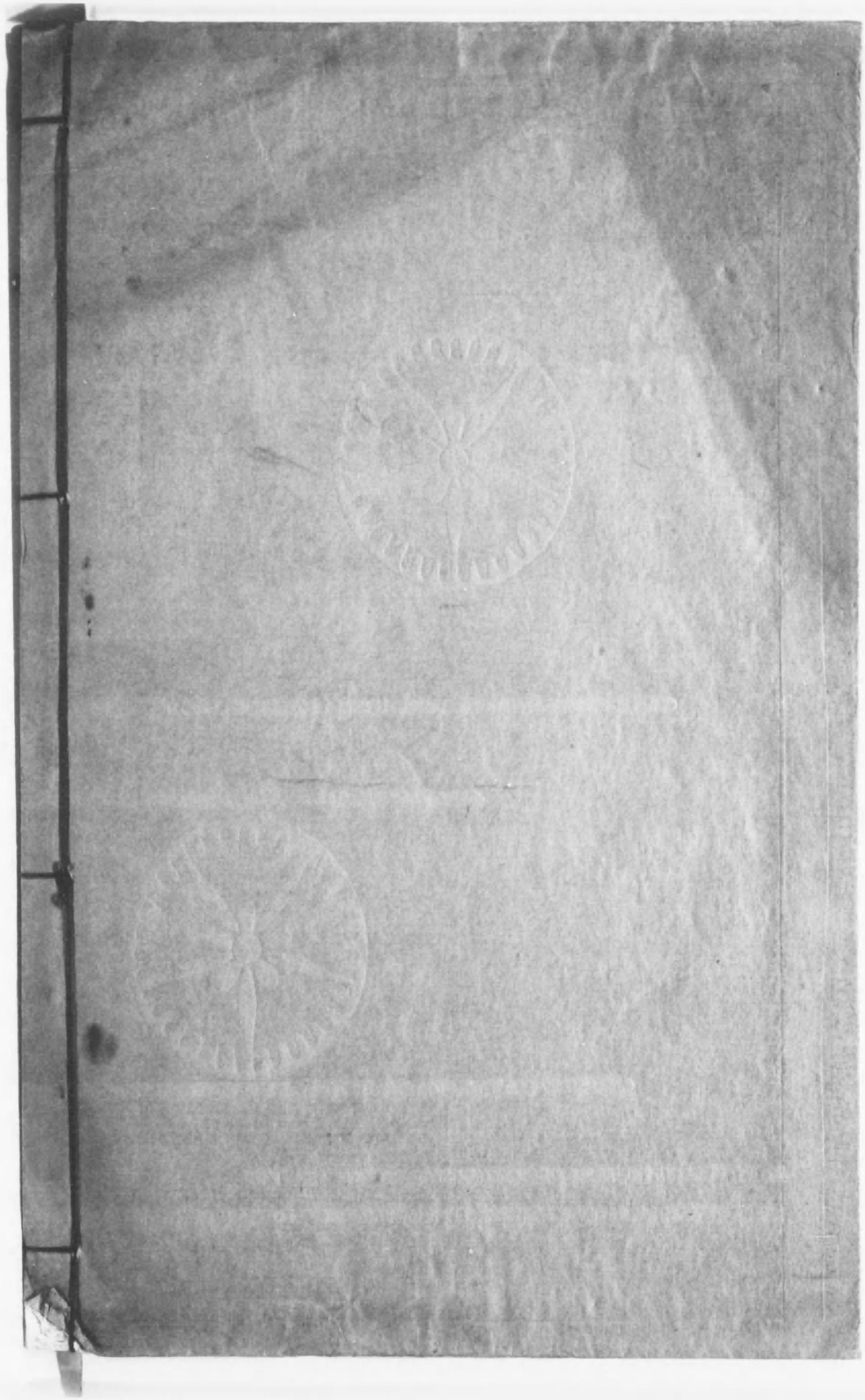
昭和十三年八月廿五日印刷
昭和十三年八月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有

著作者　東京市下谷區上野櫻木町四十八番地　寶生新

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座西六丁目三番地　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謠本刊行會

終